

101歳の挿絵画家 中一弥

大阪府北河内郡大和田村（現在の門真市）出身。
主に時代小説の挿絵画家として多くの作品を残す。小説家の逢坂剛は三男。

現役最長老の挿絵画家、中一弥さんが1月29日で101歳になった。正確な時代考証をもとに、情感豊かな挿絵を時代小説のために描きつづけて83年。「あと数年生きられるなら、新聞連載の仕事をもう一度やりたい」と、さらなる創作への意欲を語る。

中さんは1929年、直木三十五の新聞小説の挿絵でデビューした。以来、山手樹一郎（きいちろう）・吉川英治・山本周五郎・野村胡堂（こどう）・海音寺潮五郎・藤沢周平ら、多くの作家の仕事を手がけてきた。池波正太郎の「鬼平犯科帳」「仕掛人・藤枝梅安」「剣客商売」シリーズが代表作だ。

小学生のときに栄養失調で右目を失明している。「墨のなかにすべての色彩がある」が持論で、色はほとんど使わない。「墨だけで色感を出せる。色彩は読者に感じてもらえればいい」。時代考証のためなら借金をしてでも文献を集めた。気に入った女性を見たら、芸者でもカフェの女給でも頼みこんで写生した。「女性は肩の線が難しい。上がり下がりの微妙な角度で姿が決まる。

「最近は最近描きたい日本的な美人がいなくなりましたな」

2009年に本紙で、乙川優三郎さんの連載小説「麗しき花実（かじつ）」の挿絵を担当したとき、主人公の女蒔絵（まきえ）師のモデルにしたのが「ZARD」の故坂井泉水（いずみ）さん。みずみずしい美意識が印象的だった。この仕事を「いい冥土の土産」と語り、終了直後に入院したが、病床でファンレターを読み、元気を回復した。

その後も、分冊百科「池波正太郎の世界」（朝日新聞出版）に表紙絵を30枚描きおろし、昨年は約300点の挿絵を収めた作品集『亦々楽帖（またまたいちらくじょう）』（講談社）を出した。

津市で長男夫妻に介護されながら暮らし、午後は仕事部屋にこもる。00年から、三男で作家の逢坂剛さんが執筆する時代小説「重蔵始末」の挿絵を担当している。今月発売の「小説現代」3月号から連載が再開する。

「せがれは、私を長生きさせるために仕事をさせることが親孝行だと考えているのでしょう。ありがたい」

101歳まで生きて、人生は短いと思えてならない。「私の絵はまだまだです。もう一つ向こう側に何かある気がする。私のような怠け者は寿命をたくさんいただいても、やりたいことがやり切れない。あだやおろそかに、日々を暮らしてはいけません」（朝日新聞 白石明彦）



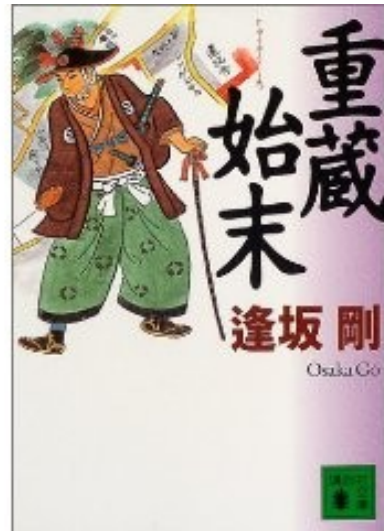
挿絵画家として現役最年長の101歳！挿絵画家歴もう80年以上、これまでに3000枚ほどの挿絵を描いてこられました。

小説を絵にすることの愉快さ。

創作意欲は尽きることがない。

常に前進あるのみ。

好きなことをずうっとやることが長生きのコツ。



中一弥には三人の自慢の息子たちがいる。『挿絵画家・中一弥』の中に何度もフルネームで登場する逢坂剛は、「僕は、逢坂剛と、一番長いこと暮らしました。彼が博報堂に入社して、昭和五十年の秋に結婚するまで、その間、ずっと一緒に暮らしていました。その頃長男は国鉄、次男は日本航空に勤めていて、すでに独立していました。」と書いているように、特に自慢の息子であったようだ。

『重蔵始末』では、中一弥待望の、三男・逢坂剛との初めての親子でのコラボレーションが実現。「逢坂剛も『重蔵始末』では、ずいぶん文献を調べたようです。近藤重蔵が火盗改をしていた時代の話ですから、どうしても池波さんの『鬼平犯科帳』と比較される。本人もそれを承知して書いているのでしょから、その度胸は大したものです。」と、目を細める。